１１月逝去教役者記念聖餐式説教　逝去した先輩から学んできたこと　　２０２２．１１．１７．

今月逝去を記念する４人の方には、私はお目にかかったことがありませんので、その先生方の思い出話をすることはできません。しかし、私は今年の７月から、神戸教区の神学塾、通信講座を担当することになり、信徒神学として、来年の５月まで、６回のテキストを作ることになっていて、現在は４回目の１月に配布するものを書いているところです。

この、信徒向け神学の通信講座のテキストを書いていると、九州教区で働き、今は天に召された先輩たちとの話や、いただいた本などが貴重なものとして、ご本人がなくなってから１０年も２０年も過ぎた今になって、テキストを作るのに大変役立っていて、この先輩たちの信仰の遺産で私が今あることを痛感しています。

今日紹介するのは、教区事務所の柴田所長のお父さん、今から２６年前に亡くなった柴田赳二司祭と、大口出身で１５年前に亡くなった堀之内孝夫司祭です。

柴田先生は、私に古いアメリカやオーストラリアの祈祷書をくださいました。祈祷書に小さな字で礼拝についての細かい指示が書かれているのを「ルブリック」と言いますが、英和辞典を見ると、『祈祷書の中の典礼規定、ルブリカ（本来は赤文字で執行規定が記されていた）と書かれています。そして実際に１９７８年のオーストラリアの祈祷書には、赤い字が印刷されていて、１５０ある詩編にも、それぞれ、詩編を唱える助けになる導入の祈りや使う目的などが赤い字で書かれています。現在、このような赤い字の入った祈祷書は、２０００年のイギリスの祈祷書くらいしか見たことがありません。

そしてもう一つ、柴田先生と話していておもしろかったのは、中国語の聖書で日本語と比較することでした。今から１５０年以上前、幕末に西郷隆盛などが聖書を読んでいた、ということですが、当時日本語の聖書があるわけもなく、おそらく武士たちが漢文を読むのに慣れていたから、中国語の聖書を通して、キリスト教の信仰が理解できたのでしょう。西郷さんがよく使っていた「敬天愛人」天を敬い人を愛する、という思想も、聖書から学んだのではないかと思います。

さて、９月に配布した、２回目のテキストは、タイトルが「信仰は、教えか、道か」ということで、亡くなった柴田赳二司祭と堀之内孝夫司祭との関わりで、学んだり、頂いた本が貴重な資料になりました。

皆さんは、ヨハネによる福音書の冒頭の言葉を覚えておられるでしょう。「初めに言があった」という書き出しですね。ところが、中国語の聖書を開くと「宇宙が造られる以前に、すでに道が存在していた。」

（参考資料）
ヨハネ１：１　宇宙被造以前、道已徑存在。道與上帝同在、道是上帝。
（初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。）
＊中国では、神のことを「上帝」と書くようです。そして、言は道なんですね。

私はこの２回目のテキストで、キリスト教は本当は「キリスト道」という方がいい、と書いたのです。

復活節第５主日の特祷は、『全能の神よ、あなたをまことに知ることは、永遠の命に至る道です。』と呼びかけの言葉があり、それに続いて『どうかわたしたちが、み子イエス・キリストは道であり、真理であり、命であることを深く知ってみ跡に従い、永遠の命に至る道を絶えず進むことができますように』と、祈ります。道という言葉が３回出てきて、イエス様のみ跡に従うことの大切さを教えている祈りです。

日曜学校などでよく歌った、聖歌の４５７番。みなさんもご存知でしょう。
「主に従い行くは　いかに喜ばしき　心の空晴れて　光は照るよ
　　み跡を踏みつつ　共に進まん　み跡を踏みつつ　歌いて進まん」

イエス様に従ってゆく、ということは、イエス様の歩まれた道、その足跡をたどって進んでゆく、ということです。そのことは、『いかによろこばしき』（どんなに喜びにあふれたことか）と歌っています。ついでに２節目３節目をみてゆくと、『いかに幸いなる』とか『いかに心強き』というふうに、イエス様の歩まれた道、その跡をたどってゆくことの素晴らしさを歌っているのです。

確かにイエス様は、ご自身が道であること（ヨハネ１４：６）を語られました。そしてイエス様に従う人たちのことを、使徒言行録などでは、やはり道という言葉で語っています。伝道者であるパウロがまだサウロという名でクリスチャンを迫害する者であったころの表現です。
『◆サウロの回心
さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、<u>この道</u>に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。』（使徒９：１～２）

私は、「この道」という言葉に出会って、私たちの信仰は、キリスト教と言うより、キリスト道と言った方がわかりやすいのではないか、と思っています。

私たちの周りには、いろんな習い事で「〇〇道」というのがあるでしょう。宗教で言えば「神道」。スポーツなら「柔道」「剣道」「弓道」、芸道なら「茶道」「華道」「書道」などなど。「キリスト教」なら、日曜日にせいぜい礼拝に行く、聖書を読む、聖歌を歌うくらいかもしれませんが、「キリスト道」なら、いつも修業をして、自分を磨くみたいなイメージがないでしょうか。考えてみれば、教会がよく使う「伝道」というのも、「道を伝える」ということですから、キリストの生き方、キリストの歩んだ道というのが正しいのでしょう。

カトリックの神父で「キリスト教徒はイエスのファン」と言った人がいて、私はこの人の説明が気に入って、自分なりにそれを発展させて考えたりしています。

遠藤周作という、もう２５年以上前に亡くなった作家ですが、この人が「おバカさん」という小説を書きました。その小説のモデルになったカトリックの神父さんで、ジョルジュ・ネランという人がいます。東京大学などで教鞭をとった、優秀な神父さんです。この人が「おバカさんの自叙伝半分」という本を書きました。その本を、私と入れ替わって八幡に住んでいた堀之内孝夫先生からいただいたのです。

ネラン神父は日本人に伝道するためには、サラリーマンが集まるスナックでバーテンをしながら聖書を説こうと、東京新宿歌舞伎町にスナックエポペというのを開いて、働いていました。この人も１１年前に亡くなったのですが、その人の本の中に、とても面白いキリスト教の説明がありました。

『キリスト教は、キリスト自身の教えたものであるよりも、キリスト自身に関する教えなのだ。キリスト教徒であるのは、キリストの教えに従うというより、生きているキリストと結ばれることなのである。
キリスト教は私たちにいろいろな人生観や世界観を運んできた。しかし、キリスト教はそういった思想体系がすなわちキリスト教なのではない。
また、キリスト教にはさまざまな規則めいたものがある。しかし、キリスト教はそういう道徳体系でもない。
キリスト教には、教会という信者どうしのつながりがある。しかし、教会がキリスト教なのではない。教会は、生きているキリストへ導く組織なのだ。
キリスト教の核心はあくまでキリスト自身にある。だからこそ、信者はイエスのファンなのである。』
（『おバカさんの自叙伝半分』より）

ちょっとイメージがわいたでしょうか。簡単に言えば、教会はイエスのファンクラブであり、一人ひとりがイエス様のことを好きで、イエス様に夢中になれるように情報を提供して、キリストへ導く組織だ、というわけです。

ファンという言葉から、私が連想することですが、ファンには２段階あると思います。最初の段階は、好きなスターを追っかけて、その人のことを知りたい、身近に感じたい、という段階でしょう。クリスチャンは、イエス様のファンですから、イエス様のことを知りたくて、聖書を学び、また関連の本を読んだり、イエス様の生活された所へ行きたい、ということで、今はなかなか難しいですが聖地旅行をしたりします。私も５回行きました。しかし、いくら旅行にお金をかけても、これらの行動は未だ、第１段階。

しかし、第２段階があります。ファンというのは、ただスターの追っかけをしているだけでは満足できなくなるのです。それは、あたかも自分がそのスターになったかのように行動することです。カラオケでスターになった気で歌うのはそのよい例でしょう。

この二つの段階について、面白い例を挙げたいのですが、皆さんはイースターの直前の１週間にふたつの行列の行進が行われるのを御存じでしょう。ひとつは、復活前主日に礼拝の最初に行なわれる、イエス様のエルサレム入城の記念として行われるものです。大斎節中の礼拝の式文には、「聖堂の外の適当な場所に集まり、そこから行列を行う。会衆はしゅろの枝を手に持つ」と書かれています。そして聖歌１３７番「ユダのわらべのほめしイェスに」を歌うのです。

これは、エルサレムの東にあるオリーブ山のふもとベトファゲという村から山を越えて城壁に囲まれたエルサレムの町まで、イエス様がロバに乗って入られるのを人々が迎える出来事を追体験するものです。本当はしゅろではなく、なつめやしの枝を持って、明るい聖歌を歌いながら行進するのでしょう。聖都エルサレムについてのビデオなど見ていると、楽しく歩いているのがわかります。

しかし私たちがその礼拝をする時には、しばしば小さなしゅろの十字架を手にするし、その日の福音書は、ロバに乗ってエルサレムに入るイエス様ではなく、その週の金曜日、イエス様が死刑判決を受けて、ポンテオ・ピラトの官邸からゴルゴタの丘へ行進し、十字架に架けられて亡くなるまでの、長い受難物語を読むのです。

そして、実際、その週の金曜日、十字架の道行きと言われる行列が行われます。死刑判決を受けてから、墓に入れられるまでの１４の留（ステーション）を回る行進をされた方もあるのではないでしょうか。イスラエルへ聖地旅行に行くと、ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）という場所では、聖金曜日（受苦日）だけでなく、毎日、巡礼者が伝統的なステーションをめぐる行進をするのです。ステーションというのは、一般には、駅、停留所という訳語が頭に浮かびますが、「人や物が立っている場所」などを意味します。漢字に「留」という字を当てはめているのも、「留まる」という意味があり、イエス様の行動を思いめぐらすためで、それぞれのテーマに沿った絵や漢字の文字などが掲げられることがあります。

この、日曜日と金曜日の二つの行列をしてその道を歩く行進は、イエス様をめぐる二つのファンの行動を表しているでしょう。日曜日は、ロバに乗ったイエス様の前や後ろになってついて行く。これは典型的な追っかけのファンの行動でしょう。しかし、金曜日の方は追っかけではありません。自分自身が、十字架を背負って歩いて行く、イエス様の気持ちになって、イエス様を演じている、とも言えるのではないでしょうか。

「キリスト教徒はイエスのファン」と言った、ネラン神父は、その本の中で大切なことを語っていました。イエスのファンになるのに肝腎なことは「霊性」だと言います。

『肝腎なのは「霊性」と呼ばれるものだ。この奇妙なことばは、Spiritualityの訳語である。その意味はこうだ。聖書の中にはキリストのさまざまな姿が見られるが、そのうちの一つを選びとり、そのキリスト像に従って自己の信仰を実践することである。』
（『おバカさんの自叙伝半分』より）

私は若いころから「霊性」という言葉に魅力を感じていました。しかし「霊」という言葉は、「風」とか「息」という意味もあって、目に見えない、つかみどころのないものと思っていました。ところが、このネラン神父の説明の、非常に具体的な表現に出会ってから、ハッキリとした道が示されたように思えたのです。
宮崎の教会では、聖餐式でパンとぶどう酒をいただいた後、座ったままで短い聖歌を歌っています。聖歌集の５５６番から５８０番から選んで２回繰り返しています。その中で特に印象に残っているのは、５６３番。
『わたしはなりたい　キリストを生きる人に　　わたしはなりたい　キリストを生きる人』
ネラン神父が肝腎な事として紹介している「霊性」をそのまま歌にしたようで、キリストの肉と血を意味する聖餐を受けるたびに、自分がキリストに似た者になれるように、自分に言い聞かせ、またそれを受けることで励まされているようにも思えるのです。今日は世を去った信仰の先輩から、いろんな影響を受けて、今の私がある、ということをお話しました。